

宗教文化教育の現状と課題

■講師 井上 順 孝（國學院大學教授）

井上 ご紹介にあずかりました井上順孝と申します。

「宗教文化教育の現状と課題」ということで、ちょうど来年度から「宗教文化士」という制度も始まりますので、そういう時期にあわせて、こういうお話をする機会を与えていただいたことは、非常にありがたいと思っております。

私が宗教教育の問題に取り組みましたのはちょうど二十年前です。個人的には、節目のときに改めてこの問題を考えられるということにもなります。パワーポイントを使いながらお話をさせていただきます。

レジュメの「はじめに」のところに書いておきましたけれども、二十年間宗教教育に関する調査・研究をやってまいりまして、改めて感じるのは、宗教を研究する、あるいは教育するときのネットワークの大切さということです。それをいかに有効に使うかが大切だということです。極めて当たり前のことでは

けれども、今の日本の現状をよく考えてみますと、まだネットワーク形成が十分ではないと感じざるをえません。

これまでのことを少しだけ振り返り、現状がどうであって、これからどんなことに取り組んでいかなければならないのか、また、私なぜ宗教文化教育というところに至ったのかを、簡単にお話ししたいと思います。

ちょうど二十年前というのは、個人的には、いろんな方と一緒に作りました『新宗教事典』が刊行された年で、何となくほっとした年でもあるのです。そのときに、新宗教の研究をやりながら感じ始めていたこと、つまり、今の日本で、宗教はどのように学校で教えられているんだろうかという関心が急に強まりました。突如として頭の中に、まるで啓示のように宗教教育をテーマにしようと思ひ立ち、日本文化研究所で宗教教育のプロジェクトをやりたいと申請して、認められまして、始めま

した。

その当時、すでにそういうことをちらほらやっておられた方と一緒に、合同でスタートいたしましたして、やるからにはまず現状を知らなければいけないということで、いろんな学校の調査、実際に学校訪問をやりました。宗教系の学校でどんな教科書を使って、どんな教材のもとに宗教の教育が行われているのかなどを調べました。本当は高校生の直接の意見を聞く機会がもつと欲しかったのですが、中高でアンケート調査するのはその当ても難しい、今はほとんどできないと思います、いろんなブライバシーの問題とかございまして。

ならばということで、高校から大学に入ってきた大学生、宗教学の授業を受けている人などを対象に、中高を振り返ってもしっかり意識調査をしたら、間接的ではあるけれども、今の中高での教育の状況がわかるんじゃないかと考えました。それに、卒業した後ですから、かえってフランクに振り返ってくれるかもしれませんということで、九二年に四千人規模の大きかりなアンケート調査をやりました。

学校の調査は、北は北海道から南は沖縄までいろんなところへ行きまして、それぞれどんな宗教的な儀礼をやっているのか、授業をやっているのか、あるいは生徒たちはそれをどう受け止めているのかというようなことを、聞いていきました。

週一日だけの授業であつても、例えば苫小牧駒澤高校、大変

立派な禅堂がありまして、ここで生徒たちはほぼ全員禅体験をします。沖縄のカトリックの小学校では、卒業式に神父さんが出られて、皆さんミサを受けられる場面も見学しました。宗教の授業は、比較的単調になる傾向がありますが、宗教儀礼というのが生徒たちにはとても心に残るんだなあ実感いたしました。

実際に、お坊さんや神父さん、牧師さんが、教壇に立たれたとき、どんな話をされるのかも、なるだけ多く聞く機会を持ちました。我々が調査していますから、生徒たちは比較的緊張して聞いているんですが、どうも眠りの時間となっている学校も多いようです。ある学校ではどうしても宗教の授業を見せてくれなかったんですが、理由がその教室を通り過ぎたときわかりました。ちらっと見ましたら、ほぼ三分の二が寝ていました。あんまり見せたくないんだらうなと思います。

その後、マレーシアやドイツなど国外にもちよつと個人的に行きまして、参考にはしたんですが、国ごとに大きく事情が違うので、とても比較はきついと思ひまして、以後は韓国との比較に焦点を絞りました。

日本文化研究所での国内の調査は、結局、二期六年やりまして、その間にデータも集まりましたし、何といつても現場の雰囲気はわかりました。日本の宗教系の学校に関する歴史の整理が個人的にはできました。

よく学生から聞かれるのは、なぜ日本はキリスト教系の学校が多いんですかとか、ミッションスクールのほうがちょっと格好いいのはなぜですかとかいいたことです。神道系は少なく、大学は國學院と皇學館しかありませんが、なぜ少ないのですかという質問も素朴に受けるのですが、こうしたことについても整理ができました。

キリスト教系の学校が多いのは、明治以来の歴史が関係します。仏教系の学校というのは、当初後継者を育てるという近世からの伝統の上に乗っかっておりましたから、発想がなかなか一般に向かなかつた。その間にキリスト教はどんどん、どんどん普通の人を育てるという教育方法を持ち込んで、影響を与えた。それで逆に仏教系が慌てて、明治中期頃から、女学校なり一般の人を対象にした学校をつくりはじめるといったことがあります。

ミッション系はヨーロッパ文明の日本人の態度と関係しておりますし、「神社は宗教ではない」とした戦前の宗教行政を踏まえると、神道系の学校が少ないのは当然にもわれます。こういう大まかな見取り図が、いろんな資料を集め、戦後の研究を検討する中で整理できました。

一つ幸いだったのは、九三年に「宗教と社会」学会という新しい学会ができて、九二年にやった調査を、学会と協力して継続的に行うというチャンスに恵まれたということでありま

す。「宗教と社会」学会に宗教意識調査プロジェクトを立ち上げ、現在まで続けております。このプロジェクトと日本文化研究所の宗教教育のプロジェクトとが合同でアンケート調査を継続し、ことし行いましたのが十回目になります。九五年から二〇〇一年まで七回、毎年やってほわかりましたので、その後、五年に二回というペースにかえました。

最初はランダム調査じゃないから当てにならないとか、いろいろ言われたんですけども、後でお見せしますが、なかなか興味深いデータが出てきております。確かに一回だけだと説得性が乏しいかもしれませんが、何回も行いましたし、四千人、五千人あるいは六千人、一番多いときは一万人を超す回答者がありました。それだけの量を集めると、ランダム調査ではなくても、はっきりと見えてくるものができてきます。そのことによつて、今の学生たちと宗教との距離とか意識とか、そういうものがいろいろつかめるようになりました。決して頭の中で、こうであつて欲しいとか、こうであるに違いないと想像してゐるわけではなくて、データを見ると、こう見るのが適切だということがいくつかあつたんです。

ちょっと協道にそれるかもしれませんが、おもしろいデータなので紹介しておきます。学生たちには毎回、「あなたは信仰を持っているか」と聞いています。今画面に映っておりますけれども、大学の中には宗教系とそうでない学校がありますので、

「全体」と書いてあるのが両方を含めたものです。「非宗教系」とあるのは宗教系を除いた一般の私立と国公立の大学です。大体いつも、それだけでも二千人を超えるデータになります。これを見ますと、なかなか興味深いです。「全体」が少し変化が大きいです、これははつきり言ってしまうと、創価大学と天理大学の学生の回答者数の影響です。両大学の回答者が多いときは上がります。

そこで非宗教系を見ますと、比較的安定していることが分かります。ところが、二〇〇一年頃から少しずつ上がる傾向になりました。ことし初めて、七%台に達しました。ひょっとしたら、信仰を持つ学生が増えているのかもしれないという推測が生まれます。若者は宗教離れしているという言い方がよくされますが、言っている人の大半はデータを踏まえているわけではありません。印象論で言っている人がほとんどであります。

これと単純に比較はできないんですけども、二〇〇八年に別の調査をやったときに、少し質問の形態が違ったのですが、非宗教系で「信仰がある」と答えた学生の割合が、十数パーセントになった。五千人ほどを対象とした調査だったのですが、ちょっとびっくりしました。私はとにかく同じ形式でことしやってみると、数値が上がるのかどうか確認しようと思って、ことしの結果を楽しみにしています。ただこの数値は入力が大半終わった時点のもので、最終結果ではないのですが、ほぼこれに

近い数値になるはず。(付記・最終的には七・五%となった) それから、宗教への関心というのも聞いているのです。これを見ていただいても、オウムの事件があった年が高かったのは、ちょっと違う理由だったかもしれないませんが、翌年から数年、ちょっと低いです。ところが、二〇〇〇年ぐらいから関心ある人も増えてきまして、ことしはほぼこの数字になると思うのですが、信仰を持っている人と合わせると過半数に達した。つまり宗教への関心自体はどうやら若い世代で増えているんだと思います。

仏教関係者や神道関係者には、あまり嬉しくない数字かもしれませんけれども、神棚や仏壇は家にあるかという質問の結果を見てみます。一人暮らしの学生もいますから、その場合、実家のを答えてもらっているのですが、十三年間の推移で、仏壇はなだらかに減っております。ことし、前回より少し上がっているのですが、誤差を考えると、緩やかに減る傾向にあるとみさせる。神棚は、仏壇よりも急激に減っています。

学生が、家にあっても知らない可能性がありますが、ぴったりとは言えないのですが、同じ内容の問いを同じ形式で聞いているわけですから、そこでの数値の変化とみると、十三年前に四六%だったのが、今三二%ということは、一〇ポイント以上落ちている。これはあきらかに実際に神棚をもつ家が減っていると考えざるを得ない。実際、神道文化学部の学生に手をあ

げさせても、家に神棚はあるかという点、半分あがらないんです。ですから、一般だと、この数値は不思議ではない。

それに対して、身近な人の写真を飾るといふのは、多少数値に変化はありますが、神棚や仏壇に比べると、変化はずっと少なくなります。

さて、宗教教育のプロジェクトは、二期六年間やったわけですね。その間に例のオウム真理教事件が起こりました。これが我々の研究にとっても一つの節目になって、最初の六年で終わらなくて、もう六年続けることになりました。結局十二年やることになったのは、一つは、このオウム事件の後、社会全体で宗教教育に関する関心が高まったということがございます。

その前に、実際に調査したり、いろいろした結果、しだいに明らかになったことを、以下に四点ほどにまとめて申したいと思います。これは今後の宗教教育を考える上でとても大事だと考えています。

まず第一は、社会が必ずしも「宗教」を肯定的にみていないこと。括弧つきの宗教なんです。これは別の調査結果など調べるによくわかるんですが、有り体に言うと、宗教という言葉のイメージというところが、初詣には七割の人がいくわけです。学生代でもお墓参りは五割が毎年いつている。そういうことからすれば、大半の人が宗教にはかかわっているじゃないですかと言

いたくなります。しかし、実際にはそれは宗教とはとらえられていなくて、宗教というのは教団のイメージとか、縛るイメージが強いのが分かります。あるいは非常に特定の強い価値観を持っていて、それを押しつけてくる人たちとか、そのようなイメージなんです。

宗教教育を考えるとときには、この社会のイメージは大変やっかいな問題になるということです。つまり、宗教を教える、それは宗派教育じゃありませんよといっても、宗教という言葉が出た途端に、ちよつと警戒が高まるということです。

教育だけじゃなくて、就職のときにもよく聞く話です。私の教えている学部は神道文化学部ですから、神道関係者が多いです。ただ一般企業にも勤める人もいます。面接試験のとき、宗教ではなくて、神道ということを出してもよくない雰囲気になることがあると言います。宗教という言葉を出してもちよつと担当者が「ウンツ？」と顔色が変わる、というような経験をした学生が少なくない。毎年似たような話を聞きます。

私は、「それでたじろぐな」「そんなところで嫌がるような会社は、入ってもろくなことないから、別のを選びなさい」とか、ゼミでは言っているのですが、現実問題として、学生たちには困った事態です。会社の一部とは思わなくて、何を信じているとか、何教であるとか、そこに入る前に、すでに宗教という言葉、あるいは神道、たぶん仏教もそうだと思いますけ

れども、そういう言葉を聞いただけで、マイナスのイメージを持つてしまう人が一定程度いるということです。これはよくないことだという以前に、現実として踏まえざるをえないということなんです。これをつくづく感じました。

このことを抜きにして、宗教というのは素晴らしいことなんだからという理念で社会に立ち向かおうとしても、平行線のままで終わるかねない。ここを何とかつなぐ方法を見つけないと、社会のイメージもかわらないだろう。これは後で言う宗教文化という言葉が私がかえた、一つの大きな理由でもあります。文化をつけるだけで、全く雰囲気がかわってくるということですね。

二番目に、宗教系の学校においては、自分たちに関係する宗教以外についての教育法は、ほとんど確立されていないことと、いうことを述べたいと思います。数多くの宗教系の学校があります。私たちの調査結果を最初にまとめた『宗教教育資料集』（一九九三）には、小学校から大学まで約九百あまりの学校のデータが書いてあります。これはプロジェクトメンバーの協力できあがったものです。朝日新聞社などは、これを参考に宗教教育に関する連載を始めました。

そのとき、実際に行つて、五十校ほどを調査したのですけれども、多くの先生たちが、どうもほかの宗教のことは教えたがらないということを感じました。教えないほうがいいと思つて

いる先生もおられたし、教えたほうがいいかもしれないけれども、自分は知らないという先生もおられた。うちは何々宗関係、あるいは何々教関係だから、ほかの宗教のことを教える必要はないんだ、というスタンスのところが多かつたんです。

印象的な例を一つお話しします。名古屋のほうのある高校に行つたときでしたが、オウム事件が起こるちょっと前ぐらいでした。生徒たちの間で、オウム真理教のことが話題になつたりする。それである生徒が先生に聞きにいく、「あれは何でしようか」。先生が、「いや、あれは邪教ですから、知る必要はありません」。それで終わりというふうに言われたというのです。

これは一つ例として挙げたわけです。要するに、教わる側が「これ、何だろう。どういうふうに理解したらいいだろう」という気持ちを持つても、教師の側が「そんなことは、知る必要はないですよ」という態度で接する。よく言えば、君子危うきに近寄らずという態度だと思ふんです。危ないものだから、とにかくいかなくていいよ。これは間違つているとは言えないんですけれども、しかし、そういう態度だけで今の社会状況に対処できるのかと、疑問に感じました。

調査中に高校の先生方から、いろんな宗教について教えらるる教科書をつくつてもらえないかと言われたこともあります。ちよつとそれを考慮した本（『図解雑学 宗教』ナツメ社）をつくつたりもしましたけれども、宗教系の学校における宗教教

育の対象に関する偏りというのは予想以上に大きいことが分かりました。キリスト教系の学校へいくと、キリスト教以外は知らない。まさに学生の神道と仏教の違いがわからないという状態が、キリスト教系の学校の先生にあたりする。仏教系の学校でも、先生の個人的努力で、かなり広くやる場合もあります。たけれども、それは少数派です。大体お釈迦様の話から自分の宗派の話にきて、それ以外はあまり関心を持たないという形が非常に多いです。自分の宗教のことについて教えるということ、そうされているんだと思うんですが、今の日本の社会における宗教を理解しようとしたときに、それでいいのかという疑問を、ここでも強く抱きました。

実際の儀礼などはとても感動的なものも多かったですし、たとえ毎週の宗教の授業は退屈でも、年数回の座禅の経験とか、ミサへ出席したものとかが、そういうものが広く心に残って、一種の宗教情操が培われるのだということも感じました。宗教というものは人間にとっては大事なものだという感覚を身につける人もいますので、儀礼の経験はその意味で非常に意義があると思います。

ただし、これは宗教情操教育の問題になりますと、後で申しますけれども、大変綱渡りのところもありまして、一歩間違えると、逆に反感を招くような結果にもなる。知識を教えるときはさほど問題にならないかもしれませんが、情操教育を教える

ときは、何よりも教える人が非常に重要になります。いくらいことを言っても、その先生の行為がそれと反するものであった場合には、かえって不信感を招く。当然のことなんです。

固有名詞をあげると差しさわりのありますので控えますが、ある学校では生徒がはつきり言うわけです。「あのシスターは愛が大事だと言うけれども、すごく意地悪な人なんです」。もし、そういうふうにならざるに生徒が思ったとしたら、その情操教育は結局どうよかたかという面も出てくるかもしれない。だから、やらないほうがいいと言っているわけではなくて、「情操教育が必要だ」とはよく言いますけれども、実際にやる段になったら、これほど慎重を要する教育はないということを、私は言いたいのです。

一般的な教育であれば、ある程度こういうことは知っておいたほうがいいですよと、そのレベルにおいては、その先生的人格がどうだこうだとはあまり言わないと思うのですが、やはり、倫理とか、先ほどの心の教育ということもありましたけれども、いわば人間の価値観や情について教える教育は、ある程度覚悟というものがなしにやると、場合によってはとんでもないことになると感じました。これが二番目です。

三番目に、情操というのがやっかいな理由として、戦後の教育と戦前の教育の関係が挙げられます。戦前と戦後の宗教教育はいろんな点で違いますが、しかし断絶しているわけではない。

いくつかは戦前なされたことを踏まえてやっているわけです。そうすると、戦後の教育の話だから戦前の話はしなくていいというわけにもいかない側面が出てきます。特に宗教情操の問題になりますと、国家神道体制という言葉が否応なく出てきます。戦前の宗教教育の歴史をやる時、一つの重要なキーワードになってくるわけで、端的に言えば国からの押しつけの情操になることへの警戒です。

これは、教育学の先生にご意見があったらお伺いしたいのですが、それでも、そういうことへの警戒を持っておられる方、結構いるわけです。もう何十年も経ったからいいじゃないかという話でもないと思うんです。だから、やってはいけないと言っているのではなく、そういう経緯があることは、常に無視はできないということなんです。そのことをどう考え、整理するかを考えた上で、次の具体的な政策を出すと、そういう手順を取らざるを得ないテーマだということでもあります。

最後の四番目に、時代を認識することの必要性です。これは後で詳しく申しますけれども、この十数年の日本の社会の変化は、私も追いつくことができないと感じているのですが、大変な変化です。今の時代に育っている小学生、中学生、高校生、大学に入ってくる人たちが、今の社会にあふれているような情報というものを、どんなふう整理し自分のものにしていくって、るんだらうかということ、想像できない場面もあります。

具体的に、ツイッターがはやっているとか、ブログが急に増えたとか、ミクシイに一人で五十も百も入っている人がいるらしいといったことは、知識としては知ってはおりますけれども、そのような日々を送っている人たちが、結果的に、まわりにある情報をどんなふう整理して、どんな価値観に結びつけていくかは、私自身も十分とらえきれなくなったという気がしております。

しかしながら、そうは言ってもそれまでの、言ってみれば「プレ情報時代」に我々は生きてきたわけです。プレ情報時代に培ったそれなりの情報の整理の仕方が、全く役に立たなくなったりは思っておりません。むしろ両方の交流の中に、新しい情報の整理の仕方というのは出てくるだろう。

そうすると、宗教を考える場合も、こういう時代環境、情報化が進む、グローバル化が進むということは、違う次元の話だとはならない。まさに正面から受け止めないと、教わる世代にとっては、何か違う話をしてますねということになると思えます。これは後半に具体的なことを触れますけれども、そういうことを感じました。

さて、こうした一方で、オウム事件が九五年に起こるわけです。これはいわゆるカルト問題が日本で急激に広まる契機となります。改めて言うまでもないのですが、アメリカでは一九七八年の人民寺院事件が人々をカルト問題に注目させたとすると、

日本ではこの事件ですね。

これは、九一年秋に私がオウム真理教の本部があった富士宮へ行ったときの写真です。これ新実です、これは村井です、坂本堤弁護士事件が起こった後でしたけど、このときはまだわからなかったときです。雑誌の取材ということで、カメラマンと二人で行きました。

これは、サティアンが壊される直前に行って撮ってきた写真、九七年のものです。

オウム事件が日本社会に衝撃を与えたのは確かですが、皆さんもお感じと思いますけれども、最近では多少風化しているように感じます。今の学生にオウム事件聞きますと、言葉はさすがに知っているけれども、リアリテイが乏しい。

最近ではまた霊能者番組が花盛りになって、オウム以前に戻ったかの如くです。九五年にサリン事件が起こった直後は、きれいになりました。それ以前、宜保愛子とかいろんな人が連日のように出ていたような状況が、サーツと霊能者番組、超能力者番組が消え去りました。ところが二〇〇〇年代にはいる頃、だんだん増えて、今、私の記憶ではほぼ九〇年代前半と同じような状況、頻度になってきたのかなと感じます。

またカルト問題というのは、一部の方は、これはきっちりやらなくちゃいけないとあって、オウムの直後にはいろんな議論も盛んになりました。しかし、これも何となく、弱まった。あ

まりみんなが飛びつく問題ではなくなりました。では宗教を学ぶことへの警戒自体は弱くなったかというところ、これはそんなに変わっていないような気がします。

つまり、先ほどデータをお示しましたように、宗教自体は、結構信じている人が少しずつですけれども増えているし、関心を持っていると。実際は日々の生活の中でいろんな形で接している。だけど、少なからぬ学生が、宗教を学ぶんだ、教わるんだという話になると、急に後ずさりしてしまうようなところがある。これは一般的なことを申し上げています。個々の宗教系の学校で、もう否応なくやるんだというようなところでは、そんなことは感じられないと思います。

宗教に関係のない大学で、私はいくつか非常勤をやっております。そうすると、終わるところ言うんです。「実は宗教学とるとまざりと思っただけです」と前置きし、とった後、「むしろ聞いてよかったと思いました」と告白するわけです。

イメージがいかに悪い、悪いというんですか、宗教学者とか宗教家にとつての宗教イメージと、一般の人にとつてのイメージの落差がある。つい見逃すのですが、私はそこを見逃してはいけなはずと感じております。どっちが正しいという問題じゃなくて、落差があるということです。そして落差をどうするかという話です。

こういうときに、皆さんご承知の教育基本法改正問題が起こ

りまして、宗教教育についても一部、ほんのわずかな改正がありました。この経緯が、またそれなりの、いろいろありますので、これには立ち入りませんけれども、自民党政権のときにいろんな思惑があつてやったことだと思ひます。ただ、宗教教育に関しては、私にとっては、「ああ、こういうふうにかわつたのか」ということで、ちよつとほつとした改正ではあつたんです。

実は、改正前には、2項「地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育」、ここを何とかかえたほうがいい、ここを宗派教育としたほうがいいんじゃないかという議論があつたんです。宗教教育はいいんだ、宗派教育が国公立では禁止されているんだと、これを明示すべきだということを、とくに宗教関係者が主張しました。ところが改正案はここは触らなかつた。そうではなくて、「宗教に関する一般的な教養」の必要性が加えられました。この改正に関しては、私自身も審議会のヒアリングに一回出たこともありますし、雰囲気がかかるのですが、そんなに大きく考えをかえない改正でいつたんだらうと思ひます。是非はいろいろあるとは思ひうのですが、私としてはこの改正の趣旨というものを、宗教関係者とか宗教研究者は、より好ましい方向に解釈するすべを論じるのがいいのではないかと考へています。

改正では宗教教育に関する条項は第一五条になりましたが、

この一五条の内容でいかどうかという議論は、それはそれで自由になされるべきだと思ひます。しかし、現実にはこの一五条というものが、少なくとも学校教育における教育基本法の態度としては、こういう方向性あるいは制約というものが生じたということを意味します。これは厳然たる事実ですね。では、どうすればこれにどう見合つた教育がなされるのかとなります。とするなら、この基本法の精神に沿つたもので、かつ公立学校の教育においても可能な宗教教育として、どのようなものがありうるかを積極的に提示していく必要が生まれます。

そこでいよいよ宗教文化教育というテーマに入つていきたいと思ひます。

宗教文化教育が今までの宗教教育に関する議論と、どう違ふかということを最初に簡単に示しておきます。宗教教育に関しましては、従来大きく三つに分けられてきました。すなわち宗派教育、宗教情操教育、知識教育です。宗教系の学校であるならば、三つとも行つてかまいません。一般の私立もやろうと思へば、可能でしょうが、宗派じゃないから宗派教育はやらない。一方、公立の学校ですと、むろん宗派教育はできませんが、知識教育は問題ない。しかし、情操教育に関しては賛否両論がある。賛否両論というのは先ほど言つたこともかかわりまして、大変面倒くさいというかやっかいな議論が繰り返されております。

先ほど戦前のことを申しましたが、もう一つ別の面の議論もあります。それは宗教情操に関して、一般的な宗教情操があるかないかという議論です。特定の宗教を踏まええない一般の宗教情操という話です。推進しようとする人たちは、そうしたものがあると主張されるわけですが、私の個人的な意見としては、それは非常に難しいと感じております。

よく命の尊厳とか、自然への畏敬とか、そうした例を出して、それだったら、特定の宗教によらない一般的な宗教情操だということですよ。けれども、それは具体的に考えないから言えることではないかというのが、私の意見です。命と申しますけれども、その命、どこまでを命と考えるのか。人間のことでしか、動物の命も入れてるんですか。家畜は、ペットは、いろんな間いが起こります。生徒たちというのは、当然具体的なことを考えるんです。

我々、日常的に行っている矛盾した行為、例えばペットは大事にするけれども、家畜は平気で殺して食べるわけですよ。それは文化のパターンになってますから疑問を持たないわけですよけれども、素直な心で見れば、素直って言うのはそういう特定の文化のパターンからはずれた問いをするならば、なぜある動物の命は平気で奪って、ある動物に対しては保護する、傷ついたら助けましょうとするんですかという問いとかが起こると思うのです。

人間だけを考えればいいのか、あるいは死刑はどうなるんだとか。命一つとっても、一般的なくくりというのは、私個人は整理するのは無理と考えています。総論は成り立つても各論になれば、やはりそれぞれということですよ。たとえばジャイナ教徒であればすべてが命だから、虫も踏みつぶさないようにします、虫を吸い込まないようにマスクをして歩きますという命の見方がある。そういう命の見方について教えることはできません、すべてに共通する命についての宗教的な情操ということ、具体的にどのように教えていけるのか、私は想像がつかないということでありまして。

宗教情操の問題は、具体的にやるとなると、相当激しい議論が繰り返されますし、解決もつきそうにないというのはあります。これも宗教文化教育を考えた一つの理由であります。

先ほど来繰り返し返しておりますように、私は、知識教育という何か受験の知識のようなイメージがあつて、非常によくはないと思ひまして、本来、知というものは、仏教でも知というのは非常に大事にしているわけです。知らないより知ったほうがいいというのは、お釈迦様もおっしゃったことであります。本来の意味の知、正しく見極めると言うことは大変重要なことで、学校教育において正しく見極める態度が養成されたならば、もう学校教育のかなりの部分はそれで達せられていて、個人的には思うほどです。

ですので、宗教に関しても、まずいろんな生徒を対象にするのであれば、それを考慮しなければならない。つまり無宗教者もいる、キリスト教の信者もいる、仏教徒もいる、非常にスピリチュアルなことが好きだ、いろんな人がいるわけですが、さまざまな価値観をもった人たちを対象に宗教について話すときには、やはり知識を出発点にする、手がかりにする、それがいいのではないのかということですが。ここはある意味で、本来の意味の知識と理解していただきたいのです。

しかし、それだけでは足りないところがあるので、必要に応じて、情操的な面も考慮すればいい。このへんがいつも問題になって、具体的にじゃあどこまでかということなんです。ここはたぶん、多少は試行錯誤的などころがあると思います。情操的な要素を、単にあの人たちは祈っているんです、座っているんですはすまない。もし試したいなら座ってもいいよという部分がどつかないと、これまた、味気ない教育になってきます。このあたりが今後いろいろ具体的に考えるべきことだと思います。

教育というのは、別にきれいにすっきり体系が整ってというものではなくて、どこかに必ず境界線が明確にできないところがあるわけです。どこまでやったらいいか、教師が格闘しながら少しずつ前へ進むというものでしかないのです、したがって情操面を少し考えるときも、どの程度がいいのかを、具

体的場面で考えるしかない。そうしたときのいわば手がかりのようなものとして、宗教文化教育というものを考えたわけです。最初のころは、伝統的宗教文化と異文化宗教、とくに異文化宗教の理解を強調したほうがいいというような意見も出ました。とにかく、今の日本人にとってあまりなじみがない宗教文化であつても、理解を深めるといふ態度を養う必要性を述べたわけです。知識を深め、異なった宗教文化を理解する態度を養うための教育、これならば社会的にも恐らく抵抗が少なく考えました。先ほどあつた、宗教を学ぶとか教えるということに対する一般社会の忌避感がかなり和らぐということですが。

この点も根柢なしに言っているわけではありません。先ほどの学生に対する意識調査結果を示します。二〇〇七年に行った調査における宗教的教育に関する学生の考えですが、学校でどんなことを教えたらいいかという問いです。命の大切さを教えるというのが一番高い、学校教育でやってほしい。宗教文化を学ぶというのが次に高い。道徳の授業というのはいかに、愛国心というのはいかに必要だという人はだいぶ減って、知識のみでいいという人はきわめて少ないです。

なぜ「宗教文化」かということについて、もう一つデータを示したいとおもいます。先ほどのアンケート調査で、九六年から九九年までは、「高校までにもっと宗教についての知識教育を教えるべきだ」と思うかどうかという設問がありました。そ

うしましたら、「そう思う」という人が一割ちょっと、「どちらかといえばそう思う」を合わせても三割程度でした。

それで、二〇〇五年には少しだけ質問をかえました。「宗教」の部分で「世界の宗教」としたので。そうしましたら数値がグッと上がったんです。言葉は、とつても大事だと思つたんですけど、「宗教を教える」というときと「世界の宗教を教える」というとき、皆さん、どうでしょうか。受ける印象がやはり少し違うと思いませんか。何か特定のものを押しつけられるという雰囲気、それでばつとなくなる。「世界の宗教」というと。

二〇〇七年にはさらに、「日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだほうがいい」と変えました。「世界の宗教文化」とし、また少しやわらかな問いにしたところ、肯定的な答えが八割少々になりました。同じ質問にした二〇一〇年でも八割近くになりました。

非常に興味深いのは、この問いを、宗教系の学校と非宗教系の学校を比べますと、どちらが高いと思われませんか。非宗教系の学校のほうが、肯定的な割合が高いんです。宗教系の学校のほうが、肯定的割合がやや低い。これは検討すべきかもしれません。これが先ほどの、学校では自分たちのことだけやればいいという姿勢が影響している可能性があります。

別の質問項目ですけど、初詣なんかも宗教系は低くなります。なぜかと考えると、それは、宗教系にはクリスチャンの方がい

る。創価学会の人もいる。そういうことで非宗教系のほうが初詣は多く行つてゐるわけです。宗教系だから宗教的な行為に参加するかとか肯定的かというところ、そうでもないことが、こういう数値を細かく見ているとわかるということです。

宗教文化教育については、「宗教文化士」という制度をつくりたいということで、隣におられる星野先生を代表とした文部省の科研費を「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」というテーマで、二〇〇八年度から三年間実施しました。

そのときに、一体学生が本当に関心があるものか、ニーズがあるものか知るべきということで、最初の年に調査を行いました。三十八の大学で、約五千名に回答してもらいました。このときに、その段階での宗教文化士についての説明をし、大学で一定の単位を取り、最終試験に合格した場合に、宗教文化士の資格を与えるという計画があるが、あなたはこの資格を取りたいと思いますかという問いです。七百名余の一四・五%が取りたいと、また二、一〇〇名余の四二・九%が条件によっては取りたいと思うと回答しました。一応肯定的な評価が過半数を占めたということです。リップサービスもあるかもしれないし、そもそもが宗教の授業をとっていたり関心がある学生でしょうから、そういうことも差し引くべきとは思いますが、それでも正直言って、思ったよりも多かったです。

宗教文化士のことでいえば、このときにもし肯定的回答が一割に達しなかったら、私はこの計画はやめようと思いました。三年間で計画は立てたけど、さすがにニーズが一割もないといたら無理ですからね。こういう調査結果というのは、もちろん当てにはなりません。実際受けるのは、この何分の一かでしょう。でも、意識がどうかというのは大事です。意識の時点で全然関心がないというのと、それなりに条件があればやってもいいかなと思う、そういう気持ちがあればかというのは大変大事で、私は調査をやつてよかつたなと思います。

ついでに、宗教文化に関する講義として、どんなものが関心あるか聞いてみました。日本の伝統的宗教のしきたりを聞きたいが四五%。新宗教はあんまり関心がなくて三割未満。キリスト教も三割ぐらい。暮らしの中の仏教はあんまり高くないですね、二七%。ムスリムに関する話も低い。文学とか文化に与えた影響というのは結構あつて、過半数です。意外に高かつたのが、神話です。約六割です。生き方なんかも関心がある。多し順に並べるとグラフのとおりです。比べると差が大きいわけですが、平均して三十数パーセントぐらいの関心があるわけですから、三人に一人、こういう問題、何か聞きたいなと思つて聞いているわけで、これはそうばかにしたもんじゃないと、私は思っています。

どんなことに彼らは今関心がある、知りたいと思つているか

は、マーケットだったらニーズ調査、マーケティングも当たり前のことでありまして、今まで宗教学つて、あんまりこんなことしてこなかったんじゃないかということも、ちらつと考えました。自分の専門に従つて話す、あなた方はそれを理解しないよという立場が支配的だったんじゃないか。彼らは本当は何を知りたがっているのか、何だったら関心を持つのか、そういう発想です。今はそういう発想を持たないと、最終的な目的が何であれ、入口のところ、学生たちが聞きたい、知りたい、本当はこういうことを学びたいんだと思つて無視してやつたら、宗教を教えること学ぶことの効果というんでしょうか、影響というんでしょうか、そういうのが何割か減ることになるんだと思います。

その一方で、私は、冒頭に申しましたように、今の時代、宗教育に限らず、教育というのはものすごく難しいと感じております。今までの近代化の中で、一人の人間が成長していく上で、どのような集団、人々が影響を与えるかということ、あるいは、もちろん第一に家庭があげられました。親がどうであるか。さらに地域社会との関係がどうであるか。学校でどんなことを学んできたか。こういうこととおおよそ言えたということ、うか、影響力をはかれたわけですが、今はいずれもこうしたものの影響力が著しく衰えている。自分の学校はそうじゃないとおっしゃる方もいらつしやると思つていますが、一般的には、

そういう傾向は明らかです。

かわって浮上してきたのが、マスメディアの影響です。しばらくはテレビがものすごい影響力を発揮し、そして九〇年代半ば以降、インターネットが参画してきて、これが見る間に大変な影響力を及ぼしている。知らぬ間に自分たちの情報、どっか誰かが、操るような状況になってきているわけです。そこに送られてきているものを見て、自分の行動を決めるというふうになってきているわけで、これはごく最近起こったことです。そういう中で教育をやることはどうということなのか、よくよく考えるべき時代になりました。

授業をやっても、 아이폰 持つてる学生がいて、講義の話をチェックしたりします。わからないときに調べてくれたりします。つまりは教員の発言がすぐチェックできる状況にあるんです。これは単なるツールの問題といえ、そうかもしれませんけれども、やはり私は、知のあり方というんですかね、人間の知識を集め、そしてそれを練り上げていくというプロセスが、ここ十年あまりの間に非常にかわってきた。このことを、それは一時期とか、それは教育に取り入れなくていいよという話ではないということを感じます。

では何ができるか。個人的にはもう限界を感じます。今からこの情報時代に十分対応しろと言われても、もうちょっとお手上げですというところがあります。そこで考えまして、まだか

えられるのは何だということ。それが、教員の個々の努力の限界ということの裏返し。つまり、研究者、教育者が、もつとネットワークをきっちりつくるといことです。

今まで我々は、研究に関してはネットワークのつくり方の蓄積がありました。学会があります。研究会があります。いろいろな研究プロジェクトがあります。さらにはこういう形で宗教家の方と研究者の方が議論する場を設けて、これが非常に大きな意味を持つてきた。つまり研究と宗教界との合流に関してはインフラがある。しかし、教育に関してはどうか。学生たちは何を考えているのか。何を求めているのか。そのことを協力してさがす努力をしてきたのだろうか。

これが宗教文化教育を、宗教文化士という形でシステム構築しようと思ったもう一つの理由で、つまり教員たちが協力するという仕組みをつくれないうこととあります。私自身の教育の限界、個人的な努力の限界ということが、一つのきっかけにはなっていますが、若い、それこそ教え始めたばかりの人たちからしても、これまた必要なことでもあるんですね。

研究、特に宗教研究などは、極端にいえば、その分野のその人が一番みたいなのがございすね。東大の宗教学なんか、みんなそれぞれの王様みたいな感じで、先生がわからないような分野のこと、どんどん、どんどんやっているわけですよ。

研究では一人が、あるいは少数が、独自のスタンスや方法で、

どんどんやっていく、それでもいいわけです。けれども今は五割の人が大学に行く時代です。ある種非常に優れた学生から、ようやく大学に入って、変な話、アルファベットも読めないような学生もいるわけです。これも一つの現実です。大学が大衆化している。その中で、しかし彼らは情報ツールにだけは長けている。そういうときに、教員だけが今までのやり方でいいのだろうか。こういうことであります。

さらに、現実の宗教の問題。グローバル化による影響を考えなければなりません。ここまで国外から来たもので身近な宗教といえ、キリスト教とか仏教でした。今は各国の多様な近代宗教が到来しています。ここに映しましたのは韓国ソウルのヨイドにあります純福音教会です。また統一教会は、韓国では学校も持っております。タイのタンマガイイというのは日本にも信者がいます。変わったところでは、ラエリアン・ムーブメントというのがあり、日本で数千人の若者がメンバーになっていると言われております。ヨーロッパのいくつかの国ではセクトとみなされているサイエントロジーも活動をやっております。こういうものは、数はまだそんなに多くはないんです。このうち、統一教会が一番日本人の信者が多いと思います。身近にこういうものがたくさん出てきた。

ちょっと前までは、遠い宗教であったイスラームに関しても、モスクが増えました。これはご存じの神戸モスク、一番

古いモスクです。この間東北大に集中講義に行ったおり、三年前に仙台モスクができたというので見せてもらいました。

去年には福岡モスクもできました。結構広くて、留学生なんか来るといふ話でした。モスクは本来祈りの場ですから、極端にいえば、建物がなくなつてモスクになるのですが、こういうバラックみたいなものをモスクにして、大体六十ぐらいあると言われますが、どんどん増えている。百になるのもそんな遠くないだろうと言われていきます。

そういう中に、次の世代は、生まれ、育ち、関係をつくつていくということです。

これは、皆さん覚えていらつしやると思いますけれども、五年前にムハンマド風刺画事件が起こりました。一番問題になつたのは、ムハンマドに爆弾つけた図です。また殉教を皮肉つた図もありました。ブルカを題材にしたものもありました。

この後で、意趣返しのように、ホロコースト風刺画が登場しました。すなわち翌年イランの新聞がホロコースト風刺画というのを掲載いたしました。一位になつたのはパレスチナ難民の壁に、アウシユピッツ収容所の絵が描かれていたものでした。

何が言いたいかというと、このようなことになるのは避けたいほうがいいということです。少なくとも日本でこれも類似したようなことが起こつてほしくない。それを避ける一つのやり方として、お互いの宗教文化の基礎的なことを知ることが

あると思っています。どうしてあの人たちはあんなお祈りして
るんだろう。どうして、ああいうところに集まるんだろうとい
うことに理解をする。

私、今、年に三〜四回ほど警察大学校に行つて、一コマだけ
ですが宗教社会学の講義をやっています。幹部候補生の方が五
百人ぐらい聞いているのです。

そうしたおりに、「毎週金曜日にバラックに中東の人が集まっ
ているといつても、あやしいと思わないでください。それは熱
心なムスリムたちが集団礼拝にやってくる可能性が高いで
す」などと話したりします。

宗教を学んだ人にとっては、ムスリムは金曜日モスクに集
まつて集団礼拝をするなんていうのは基礎的なことです。その
知識があるとないで、例えば現場の警察官が、「新しくつく
られた建物に、金曜になると外国人が何か集まってくるんです
よ」と、仮に住民の通報を受けたときに、どういう違いが出る
か。これは全く一つの例ですけどね。知っていることでちよつ
と防げることとか、変なフリクションを起こさない、そういう
ことがあり得ると思います。そういうことも考えざるを得ない
世の中になってきた。

そこで、宗教文化を教えるというときに、私は教育という視
点から、研究者がネットワークをつくることを一つ申し上げま
した。彼らがどういふことに関心を持っているのか、もっと目

を開かなくてはいけない。授業研究会という集まりでもできま
して、若い人の発表やら聞きますと、いろんな問題を抱えている
ことがわかります。また若い教員は新しい教育法を試みている
んです。ためになりました。

これまで宗教を考える、宗教文化を考えるとき、まずあがる
のは、文学作品とか、音楽、絵画などでした。

さらに映画だつて素材にできる。これは去年、フォーラムを
やりまして、アメリカのワトキンスさんという人が、映画を宗
教学の講義に組み込む試みを具体的に話してくれました。「キ
ングダム・オブ・ヘブン」というような題材でも、イスラーム
を論じるときにいろいろ面白い場面があるという発表もありま
した。

世界遺産は宗教を教える、いいとつかかりであります。日本
にも十四の世界遺産がありますけど、その半分の七つは明らか
に宗教、仏教や神道が絡んでいます。そこを導入に、「さあ、
仏教と文化との関わりを、もう一回考えてみましょう」という
使い方、十分できます。

さらに言えば、まんがだつてなるんですね。「聖☆おにいさん」
という漫画を、皆さん、どれぐらいご存じでしょうか。若い人
はたいてい知っています。仏陀とイエスが現代社会で共同生活
して、立川に住んでいる、そういう話です。なかなかおもしろ
い発想です。あるいは、鷲宮神社を舞台にしたまんががありま

す。「坊主DAYS」というのがすごくはやっていますし、「読経しちゃうぞー」とか「さんすくみ」「さんすくみ」はおもしろい。坊さんと神職と牧師になる予定の人がお互いの悩みを話すというものです。

さらにもう一つつけ加えると、恐らく動画というものを今後は教育に取り入れないといけない。これまではテレビが主役で、テレビによく出る人のことは知っている。逆にテレビに出なければあまり知らない。池田大作氏だって、学生はあんまり知らないです。なぜならテレビに出ないから。逆に誰でも知っているのが江原啓之氏ということになります。

さらに最近ではウェブ上に宗教情報があふれています。ネットに情報氾濫していればいるほど、教える側というのは、それに対応したネットワークを構築して情報リテラシーを少しでもつくる必要が出てきた。そういうことにしなければならぬということも、「宗教文化士」を構想したひとつの理由です。

この制度がどんな構想かは、お配りしたコピーにおおよそ示してあります。もしご質問がありましたらこれでお受けすることにして、きょう申し上げたようなことを、テーブルの上だけで議論しているだけでは先に進まない。やはり具体的システムとしてつくりあげて、協力して教材を開発したり、授業法を勉強しあったり、学生さんたちのインセンティブを高めるような仕組みをつくり必要がある。そういうことで、来年度から

の発足ということになった次第です。

持ち時間を誤解していたため、後半、早足になってしまいました。もしご質問がある方はそこで対処することにしたと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

島園 打ち合わせが悪くて申しわけありません。

続いて、稲垣先生のお話もありますので、七分ぐらいずつお話をいただくというふうには、私が勝手に考えておりました。今から十五分ぐらいあるかと思しますので、体系的なお話をいただきまして多岐にわたっておりましたので、皆さん、ぜひ質問したいということがあるに違いないと思います。

早速質疑応答に入りたいと思います。

山野井 山野井と申します。

大変興味深いお話を聞かせていただきありがとうございます。宗教文化士というのは、学生さん対象なのか。将来一般社会人がこれを指すとすれば、何らかの資格とか要件とかお考えなのか、一般社会人のかかわり方があれば、お聞かせいただきたい。

井上 当面は一応学生です。といっても、社会人の学生もいます。一般の方に関しては、もしこれがある程度軌道に乗りましたら、次のステップということを考えております。実際、一部企業関係者からも要望があります。そういうことを知ってお